

MEDIA RELEASE • COMMUNIQUE AUX MEDIA • MEDIENMITTEILUNG

2000年8月9日

**第5回 ノバルティス メノポーズ・アワード
受賞者決定**

ノバルティス メノポーズ・アワードの第5回受賞者が決定されましたので、下記の通りお知らせいたします。この賞は、更年期の女性に関する医学、看護学、保健学などの発展・進歩に寄与する優れた業績を顕彰することを目的に、1995年に創設されたものです。

医学部門と看護学・保健学部門の2つの部門から構成され、毎年3名の受賞者が選出されます。第5回の募集は、昨年11月から今年3月まで行い、医学15件、看護学・保健学3件の合計18件の応募がありました。応募された業績について、2000年5月26日に開催されました選考委員会において、慎重な選考を行った結果、3名の先生方が選出され、顧問の承認を得た後、受賞者として決定されました。

なお、贈呈式は8月13日（日）に、京王プラザホテルにて行われます。

記

- 受賞者：
 - < 医学部門 >
 - ・ 東京女子医科大学産婦人科学教室 主任教授 太田 博明 先生
 - ・ 熊本大学医学部循環器内科 助手 河野 宏明 先生
 - < 看護学・保健学部門 >
 - ・ 東京大学大学院教育学研究科身体教育学講座 教授 武藤 芳照 先生
- 贈呈式： 2000年8月13日（日） 東京・京王プラザホテル
- 顕彰内容： 表彰状、記念楯、副賞（賞金100万円）を贈呈
- 選考委員： 別紙参照

メノポーズ：女性の閉経のこと

HRT： Hormone Replacement Treatmentの略（ホルモン補充療法）で、女性の更年期ホルモンが減少して起こる様々な症状に対して、エストロゲンとプロゲステロゲンの女性ホルモンを投与する治療法

お問い合わせ先：

ノバルティス ファーマ株式会社
広報グループ・喜多 英人
TEL: 03-3797-8027 / FAX: 03-3797-4367

< 医学部門 受賞者 >

おおた ひろあき

太田 博明

昭和19年11月7日生まれ

東京女子医科大学産婦人科学教室 主任教授

略 歴 :

1970年 3月	慶應義塾大学医学部 卒業
1970年 4月 ~	慶應義塾大学病院産婦人科 助手
1971年 3月 ~	国立栃木病院産婦人科 厚生技官
1977年 6月 ~	慶應義塾大学病院 伊勢慶應病院 産婦人科医長
1978年 4月 ~	東京電力病院産婦人科 副科長
1990年 9月 ~	慶應義塾大学病院産婦人科 診療医長
1991年 4月 ~	慶應義塾大学病院産婦人科 専任講師
1993年	慶應義塾大学病院漢方クリニック 診療担当医兼任
1993年 4月 ~	慶應義塾大学病院産婦人科 診療副部長
1995年10月 ~	慶應義塾大学病院産婦人科 助教授
2000年 2月 ~	東京女子医科大学病院産婦人科 主任教授

研究テーマ：健康寿命延長のための更年期における対応の重要性

- 中高年女性におけるヘルスおよびウェルネス・ケア -

わが国の女性における平均寿命の延長は極めて著しく、84歳を超え、久しく世界一の長寿を誇っている。一世紀前には生殖機能の終焉である閉経になるかならないうちに生命寿命が尽きてしまい、50歳以降は余生といわれるなど、女性ホルモンが消退してから過ごす期間はあってもごく短期間であった。そして生殖機能が消失したあとも生命寿命が存続するものは各種の動物の中で人類のみとなった。ところがこのように莫大な生命量を獲得した今日、女性の心身の守護神ともいべき女性ホルモンの主体をなすエストロゲンが消退してから過ごす期間が40年近くと長期に亘るようになった。一方、われわれ人類の臓器や器官は人生50年のものであるため、昨今の生命寿命の延長はこれらの臓器や器官の耐用年数をはるかに上回るものである。その上各種の生活習慣のツケと加齢が相まって、中枢神経系の疾患や排尿機能の低下および皮膚の性質の変化、そして骨粗鬆症や高脂血症、ひいては動脈硬化性心血管系病変など各種の退行期疾患が発症するが、これらの疾患は心身の健康寿命を損ない、医療や介護ニーズの増加をもたらしている。

われわれは閉経にまつわる各種の臨床研究を行い、エストロゲンの低下を主因とする女性の各種退行期疾患に関して、その対応と管理のために役立ついくつかの知見を得ている。すなわち、閉経により血清脂質は明らかに劣化していることが判明しており、それは50歳代の更年期外来受診者の約1/3が高脂血症に罹患している事実からも明らかである。これらの人はやがて高血圧となり、約10年後には冠動脈や脳動脈の硬化を呈し、その後心筋梗塞や脳梗塞などの心血管系病変をもたらすことになる。骨においても同様で、平均的日本人女性は45歳で骨量が低下し、60歳で骨量減少症、70歳で骨粗鬆症となり、年間7万件の大腿骨頸部骨折を来し、寝たきりの一因となる。このようにエストロゲンの低下に加齢が加わることにより、いずれは生活習慣病に進展すると考えられるので、人生の中間点・折り返し点である更年期から未然に防ぐという一次予防が何にもまして重要となる。つまり、心身の健康寿命を伸ばすためにも、更年期を心身の健康のチェックに取り組むよい機会とすべきである。

< 医学部門 受賞者 >

かわの ひろあき

河野 宏明

昭和39年11月11日生まれ
熊本大学医学部循環器内科 助手

略 歴：

1990年 3月	熊本大学医学部 卒業
1990年 6月	熊本大学医学部循環器内科 研修医
1991年 4月	健康保険八代総合病院 内科研修医
1991年10月	熊本市医師会病院 内科研修医
1992年 4月	福岡徳州会病院 循環器内科医
1993年 4月	熊本大学医学部循環器内科 医員
1998年 4月	熊本大学医学部循環器内科 助手
1999年 3月	医学博士（熊本大学）

研究テーマ： 閉経前女性の内因性女性ホルモンの変動と狭心症発作との関係

閉経後女性にEstrogenを補充すると虚血性心疾患の発症は減少する。Estrogenは脂質代謝を改善し、また血管内皮のnitric oxide synthase を活性化しnitric oxideの産生・放出を増加させることなどにより血管内皮機能を改善し、動脈硬化進展を抑制することが報告されている。一方、冠攣縮は冠攣縮性狭心症のみならず不安定狭心症や急性心筋梗塞など虚血性心疾患全般の発症に深く関与している。我々は、血管内皮機能障害が冠攣縮の一因であることを報告した。Estrogenは血管内皮機能障害を改善することから、冠攣縮を抑制し、抗狭心症作用を有する可能性がある。

閉経前女性の冠攣縮性狭心症患者の狭心症発作頻度と、月経周期中の内因性女性ホルモンの変動との関係について検討した。結果、発作は内因性Estrogenが低下する黄体期から月経期にかけて増加し、Estrogenが増大する卵胞期に減少した。血管内皮機能は黄体期から月経期にかけて低下し、卵胞期に改善した。また、閉経後女性の冠攣縮性狭心症患者の狭心症発作にEstrogen補充療法が有効であるか否かも検討した。結果、Estrogen補充後の過換気負荷試験では、発作は誘発されなかった。血管内皮機能もEstrogen補充後に改善した。

閉経前女性は常に女性ホルモンによって守られているわけではなく、特に動脈硬化危険因子を持つ患者は、血管内皮機能が低下する黄体期から月経期にかけて急性心筋梗塞などの虚血性心疾患が発症する可能性が高い。さらに、Estrogenの冠攣縮抑制作用の一機序として、血管内皮機能改善が示唆される。Estrogen補充療法は冠攣縮性狭心症の有効な治療法の一つになり得る可能性があると考えられる。

<看護学・保健部門 受賞者>

むとう よしてる

武藤 芳照

昭和25年10月15日生まれ

東京大学大学院教育学研究科身体教育学講座 教授

略 歴：

1975年 3月	名古屋大学医学部 卒業
1980年 3月	名古屋大学大学院医学研究科修了 医学博士
1980年 4月	東京厚生年金病院整形外科 医長
1981年 8月	東京大学教育学部 助教授
1993年 4月	東京大学教育学部 教授
1995年 5月～	東京大学大学院教育学研究科 教授
1998年 8月～	東京厚生年金病院整形外科 客員部長

研究テーマ：中高年女性の転倒・骨折予防の研究および実践活動

1. ヒトはなぜ転ぶのか

中高年女性の骨粗鬆症に伴う骨折、特に「寝たきり」との関連が強調される大腿骨頸部の骨折の原因は、骨のもろさと転倒にある。我々の続けてきた調査研究の結果から、ヒトが転ぶのは、肥満傾向、脚力（健脚度）の低下、動脈硬化が主に関係していることが示された。つまり、ヒトが転ぶのは、人が長い進化の間に獲得してきた直立二足歩行がしっかりできない程、からだ全体の運動機能、感覚機能が衰弱した表われととらえることができる。その基盤が先の3つの要因であれば、中高年女性の転倒・骨折は、いわゆる「生活習慣病」として、生活指導により予防が可能という理論が成り立つわけである。

2. 「老化は脚から」を測る

健脚度は、我々が、独自に開発・工夫した中高年者の転倒回避能力の指標である。歩く（10m全力歩行）、またぐ（最大一步幅）、昇って降りる（40cm踏台昇降）の評価より成り立ち、科学的妥当性を有し、中高年者の生活実感を伴った運動機能評価法として、転倒予防の取り組みに有用である。

3. 「転倒予防教室」の運営

上記の理論を基に、平成9（1997）年12月、東京厚生年金病院に我が国初の「転倒予防教室」を創設し、運営を続けている（修了者：約200名）。様々な職種、専門的技能を持つ指導者が連携・協力して行うチーム医療・保健活動である。「健康情報発信基地」としての病院像を示し、自由診療（56,871円：コロナイ）による運営のモデルともなり得る。また、修了後も月1回の再会教室や2回目の健診（ニコニコ健診、25,250円）により、生涯にわたる健康管理の実践と臨床データの蓄積ができる連続性を保たせている。

4. 介護予防

介護保険制度が始まった。しかし、誰も「寝たきりにはなりたくない」、「介護される状態にはなりたくない」、「死ぬまで健康でいたい」と願っている。

転倒予防教室の理念と実践活動は、すでに『転倒予防教室 - 転倒予防への医学的対応』（日本医事新報社、1999）にまとめられて発刊され、全国への普及・啓発の一助となっている。また、多くの地方公共団体から介護予防のための具体的な取り組みとして、照会、視察、「1日転倒予防教室」開催の依頼が寄せられている。こうした活動と、事業の地道な拡大が、今後の介護予防につながっていくことを期待している。

ノバルティス メノポーズ・アワード

選考委員会

選考委員長：

麻生 武志 先生（東京医科歯科大学 医学部 産婦人科 教授）

選考委員：

中野 仁雄 先生（九州大学 医学部 婦人科産科 教授）

武谷 雄二 先生（東京大学 医学部 産婦人科 教授）

前原 澄子 先生（三重県立看護大学 学長）

伊達 ちぐさ 先生（大阪市立大学 医学部 公衆衛生学 助教授）

顧問

小林 拓郎 先生（九州看護福祉大学 学長）

吉田 信弘 先生（読売新聞 編集委員）

見城 美枝子 先生（青森大学 教授・エッセイスト）

- 第1回受賞者 -

(1996年)

<基礎研究部門>

森田 育男 先生 (東京医科歯科大学歯学系大学院 細胞機能制御学講座 助教授)

テーマ: 更年期における骨塩含量減少機序の解明

<臨床部門>

細井 孝之 先生 (東京大学医学部老年病学教室 講師)

テーマ: 閉経後の骨代謝における多様性とエストロゲン受容体遺伝子多型性との関連

<看護・保健部門>

アルベリー・信子さん (日本アマラント協会 創設者 会長)

テーマ: 中・高年期の女性が、自分のからだについての正しい知識を得ることにより、閉経期を心身共に健やかに乗り越え、閉経後の人生のQOLを実現するための啓発活動の展開。

- 第2回受賞者 -

(1997年)

<基礎研究・臨床部門>

尾林 聡 先生 (東京医科歯科大学医学部産婦人科 助手)

テーマ: ヒト血管における女性ホルモン制御および動脈効果発症に関する研究

宮浦 千里 先生 (昭和大学歯学部生化学 講師)

テーマ: エストロゲンの骨髄造血調節作用に着目した閉経後骨粗鬆症の発症機構の解明

<看護・保健部門>

吉沢 豊予子 先生 (長野県看護大学 助教授)

テーマ: 中高年女性のヘルスプロモーションの特徴に関する研究

- 第3回受賞者 -

(1998年)

<医学部門>

水沼 英樹 先生 (群馬大学医学部 産科婦人科 助教授)

テーマ: 閉経後骨量減少の自然史に関する研究とその対策

緒方 りか 先生 (九州大学医学部婦人科学産科学教室 助手)

テーマ: 卵巣性ステロイドの二つの作用機序からみた血管機能制御の研究

<看護・保健部門>

横山 徹爾 先生 (東京医科歯科大学難病疾患研究所 社会学研究部門(疫学) 助手)

テーマ: 更年期における循環器疾患のリスク・ファクター

- 第4回受賞者 -

(1999年)

<医学部門>

若槻 明彦 先生 (高知医科大学医学部附属病院 講師)

テーマ: 閉経後女性における虚血性心疾患の発症とその予防に関する研究

五来 逸雄 先生 (横浜市立大学医学部産科婦人科教室 講師)

テーマ: 閉経(エストロゲン欠乏)による骨代謝の変化と骨代謝マーカーの臨床応用に関する研究

<看護・保健部門>

三羽 良枝 さん (メノポーズを考える会 代表)

テーマ: 患者の立場からのより良い更年期医療をめざして

なお、第2回は基礎研究と臨床を併わせて基礎研究・臨床部門とし、第3回より医学部門に改組。

< 参考資料 > ノバルティスの医学賞、研究助成

ノバルティス・リウマチ賞（旧 日本チバガイギー・リウマチ賞）

[主催：財団法人 日本リウマチ財団 協賛：ノバルティス ファーマ株式会社]

1990年設立

目的：リウマチ学の発展、進歩に大きく寄与する可能性を有する独創的研究を顕彰し、その継続を援助することを目的とし、財団法人 日本リウマチ財団は「ノバルティス・リウマチ賞」を設ける。

顕彰内容：毎年300万円

ノバルティス地域医療賞（旧 Ciba地域医療賞）

[主催：ノバルティス地域医療賞委員会 後援：社団法人 日本医師会]

1994年設立

目的：全国各地で住民に密着して医療活動に従事し、優れた功績を挙げ、地域住民の保健衛生の向上に著しく貢献された、日本医師会会員の方を表彰する。

顕彰内容：日本医師会会長及び各都道府県医師会長から推薦された応募者をノバルティス地域医療賞委員会にて受賞者を選考し、毎年1回表彰する。受賞者には表彰状と記念の楯並びに副賞として100万円を贈呈。

ノバルティス老化および老年医学研究基金（旧 サンド老化および老年医学研究基金）

[主催：日本老年医学会 協賛：ノバルティス ファーマ株式会社]

1986年設立

目的：老化にともなう生化学的、薬学的、免疫学的、医学的分野を支援、また、これまでに研究されていない分野における疫学的分野や行動研究を支援し、老年医学および老年病学の革新的な研究を世界的に促進させること。旧サンド社の創立100周年を記念して設立。

助成内容：毎年5～6名に各150万円

財団法人 ノバルティス科学振興財団（旧 チバ・ガイギー科学振興財団）

[出捐者：ノバルティス社（スイス・バーゼル）]

1987年設立

目的：自然科学の創造的研究およびそれに携わる若い研究者の国際的交流に対する助成を通じて、日本の学術の発展と福祉の向上に寄与すること。

助成分野：1. 医薬、農薬等の開発に寄与する生命科学領域
2. 有機新素材の発展に貢献する化学・物理学領域の基礎研究